



6022 NP0法人金蔵学校と集落の連携に着目した地域運営の仕組みに関する一考察：輪島市町野町金蔵を対象として(NP0・地域主体によるむらづくり, 農村計画)

金, 斗煥
山崎, 寿一

(Citation)

学術講演梗概集. E-2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, 2011:431-432

(Issue Date)

2011-07-20

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003066>



NPO 法人金蔵学校と集落の連携に着目した地域運営の仕組みに関する一考察

— 輪島市町野町金蔵を対象として —

正会員

○金 斗煥 1*

正会員

山崎寿一 2**

過疎地域	能登半島	NPO 法人金蔵学校
集落との連携	地域運営の仕組み	金蔵

I はじめに

1. 1 研究の背景と目的

研究対象地域である金蔵（石川県輪島市町野町金蔵）は、過疎地域である輪島市（奥能登地方）の東の縁辺部に立地しており、人口減少と高齢化が深刻な集落である¹⁾。

過疎化の中で金蔵には、「NPO 法人金蔵学校」が発足し（2000 年）、様々な地域おこしの活動を行ってきた。その中で「万燈会²⁾」は成功した活動として挙げられる。しかし、万燈会の規模が拡大するとともに、NPO 法人金蔵学校のメンバーだけでは、万燈会が運営できなくなっており、集落の住民らの賛同を得て、集落（金蔵区）の行事になった。このような経過を経て、万燈会は NPO 法人金蔵学校から集落の行事になっており、金蔵は集落を単位として地域運営の仕組みが把握できる研究対象地域として位置づけられる。

そこで、NPO 法人金蔵学校の活動を中心に、NPO 法人金蔵学校と集落の連携に着目し、集落を単位とした地域運営の仕組みを明らかにすることを本研究の目的とする。

1. 2 研究の位置づけと研究方法

過疎化地域の農村集落を維持するために、近年集落間の連携におけるコミュニティの再編に着目した農村計画のあり方が注目されている¹⁾。本研究では、NPO 法人金蔵学校と集落との連携に着目し、集落を単位としての地域運営の仕組みを把握している点に学術的意義がある。

上記の研究の目的を明らかにするために、①金蔵の組織を整理するとともに、NPO 法人金蔵学校の活動を把握した。②その活動を運営するために NPO 法人金蔵学校と集落の組織がどのように連携しているかを把握した。③NPO 法人金蔵学校と集落の連携による地域運営の仕組みについて考察した。

II 調査結果

表 1 に、金蔵の組織を整理するとともに、NPO 法人金蔵学校の活動の実態とその活動における NPO 法人金蔵学校と集落の組織との連携の実態をまとめた。

2. 1 金蔵の組織

金蔵の組織は、地縁的組織、有志らによる組織に代別できる。前者は、「金蔵区」、「そうせい会」、「老人会」、「婦人会」、「自警団」、「婦人消防団」であり、後者は

「NPO 法人金蔵学校」、「営農クラブやすらぎ」、「あかり会」である。それ以外に、「万燈会実行委員会」、「金蔵自然文化研究所」がある。万燈会実行委員会は、万燈会が集落の行事になって作られた組織である。金蔵の地縁組織と有志らによる NPO 法人金蔵学校で構成されている。「金蔵自然文化研究所」は、金沢大学地域連携センターと NPO 法人金蔵学校が連携し、発足した組織である。空家を活用した金蔵自然文化研究所を開設・運営している。この二つの組織は、二つ以上の組織で構成されている複合的組織であると考えられる。

2. 2 NPO 法人金蔵学校の活動（三本目の矢の構想）における NPO 法人金蔵学校と集落の組織との連携の実態

NPO 法人金蔵学校は、三本目の矢は折れないという発想を基に地域おこしの活動を行っている。

(1) 一本目の矢の場合

一本目の矢は、集落の生産基盤（耕地）の再構築に向けて活動を行うことである。具体的には、NPO 法人金蔵学校、金沢大学地域連携センター、金蔵区が連携し、ワークショップを行った（2011 年 2 月）。金沢大学地域連携センターが GIS を利用し、棚田を含む集落環境マップを作成し、集落環境の現況を報告した。金蔵区の役員達からは、今後どの様にデータベースを活用し、棚田を含む集落の環境を維持していくかに関する議論が行われた。

(2) 二本目の矢の場合

二本目の矢は、地産地消である。具体的には、金蔵の米のブランド化を進めている。そして、NPO 法人金蔵学校はあかり会と連携し、味噌の加工や漬物の開発を進めている。これを販売する場所（直売場）として、営農クラブやすらぎが作った休憩所（ログハウス）を使うことになった。

(3) 三本目の矢の場合

三本目の矢は、交流人口の拡大である。具体的には、集落の行事になった万燈会を活用し、万燈会実行委員会と連携し、集落に訪れる人を増やす取り組みである。近年、金蔵は「にほんの里 100 選²⁾」に選ばれ、金蔵の風景を楽しみながら、集落を散策する人たちが少なからず増えてきている。大きな狙いは、集落外から金蔵を訪れる人達が金蔵の良さを知り、楽しむ事で、金蔵の定住人口を増やそうということである。

表1 金蔵の組織及びNPO法人金蔵学校と集落の組織との連携の実態

(1) 金蔵の組織					(2) 万燈会運営における組織間の連携の実態								(3) NPO 法人金蔵学校活動における組織間の連携の実態	
区分	組織	発足年度	分類	■組織の構成と活動内容 注1)「金蔵の役員」は、「金蔵大区長」、「金蔵副区長」、「第1・2・3集落の区長」、各地下(町内会)別の「金蔵区委員」、「営農組合長」である。	■万燈会実行委員会の構成 *以下の数は人数を示す。								■「三本目の矢の構想」 ①一本目の矢：集落の生産基盤(耕地)再構築の活動 ②二本目の矢：地産地消の活動 ③三本目の矢：交流人口の拡大の活動	
					組織	顧問	会長	副会長	幹事	会計	事務局	委員	監査	■「三本矢の構想」と活動実態 ①一本目の矢 ・棚田のデータベース作成のために、NPO 法人金蔵学校と金沢大学地域連携センターと金蔵の役員(金蔵区)が連携し、GIS を利用した棚田のデータベースを作成し、ワークショップを開催した。 ②二本目の矢 ・金蔵の米のブランド化、味噌や漬物の開発(あかり会の主婦達と連携)、金蔵の特産物を販売する直売所を開設(営農クラブ安らぎが作った休憩所(ログハウス)を直売所として活用) ③三本目の矢 ・万燈会を活用し、万燈会実行委員会と連携し、金蔵に訪れる人を増やす活動をしている。
A	金蔵区	—	地縁的	金蔵の役員 ^{注1)} と住民、金蔵の年中行事を実行する。	A	1	1	2	2	2		9	2	
B	そうせい会	—	地縁的	消滅した青年団を引き継ぐ組織、40、50代の男性	B			1				2		
C	老友会	—	地縁的	65歳以上の高齢者、カラオケ大会を開く	C			1				2		
D	婦人会	—	地縁的	金蔵の婦人達、集落の行事と町野町の活動に金蔵が参加する場合、食事の支援活動	D			1				2		
E	自警団	—	地縁的	金蔵の男性達、集落の防災活動	E			1						
F	婦人消防団	—	地縁的	金蔵の婦人達、集落の消防活動	F			1						
G	NPO 法人金蔵学校	2000	有志	有志らの組織、50～80代の男性 地域おこしの活動	G				1	5				
H	万燈会実行委員会	2007	地縁的 +有志	集落の役員、住民、NPO 法人金蔵学校のメンバー万燈会を実行する。	■万燈会実行委員会の役割分担 ①総務・渉外部(協賛金広報企画部、学生ボランティア公募企画部) ②企画部(催事企画部、売店・店舗広報企画部、ボランティア・催事出演者まかない) ③広報部(広報企画部、看板整備企画部) ④会場・警備企画部(シャトルバス運行企画部、交通整理整備企画部、中央会場設営部)									
I	営農クラブやすらぎ	2007	有志	有志ら、50、60代 耕作放棄地の耕作・管理、メンバー達の交流										
J	金蔵自然文化研究所	2007	大学+有志	NPO 法人金蔵学校と金沢大学地域連携センターが連携し空家を活用した地域連携施設を開設、運営										
K	あかり会	2010	有志	有志ら、60、70代の女性										

(1) 万燈会実行委員会の構成

万燈会実行委員会は、顧問、会長、副会長、幹事、会計、事務局、委員、監査で構成されており、金蔵区の役員、地縁的組織の会長と副会長、NPO法人金蔵学校のメンバー、金蔵の五つの寺の住職、住民らが構成員になっている。構成員は、総務・渉外部、企画部、広報部、会場・警備企画部の役割を担う。万燈会実行委員会の構成員をリーダーとして、住民は、自分に適している部内の活動に参加し、手伝う仕組みになっている。

Ⅲ まとめ

3. 1 結論

Ⅱの調査結果から、NPO法人金蔵学校と集落の連携による地域運営の仕組みについて考察し、図1の模式図が得られた。考察した内容について以下にまとめる。

①万燈会が集落の行事になったことから、NPO法人金蔵学校だけでは地域の活性化の活動を継続することは難しいという教訓が得られた。

②NPO法人金蔵学校と集落の地縁的組織と有志らの組織が連携することによって、NPO法人金蔵学校の活動(三本目の矢)のみならず、集落全体としての地域活性化に膨らみつつある。

③集落の行事になった万燈会を運営するために、集落の地縁的組織を活用することで、集落の全住民が万燈会に参加できる仕組みを作っている。これは、住民らの交流を増やす地域運営の仕組みとして有効であると考えられる。

3. 2 今後の課題と展望

本研究では、NPO法人金蔵学校の活動を中心にNPO法人金蔵学校と集落の連携に着目し、地域運営の仕組みに

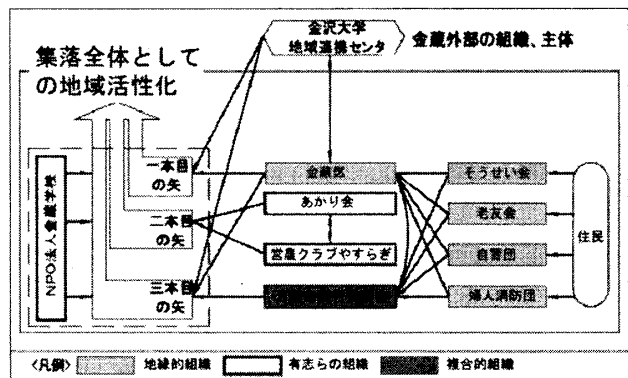


図1 NPO法人金蔵学校と集落の連携からみる地域運営仕組みの模式図

ついて考察した。NPO法人金蔵学校の活動だけでなく、集落を単位として集落機能の維持の実態を把握することと集落全体として集落を維持することが集落にどのような効果があるか、その際の問題点は何かを把握することが今後の課題であると考えられる。

謝辞

本研究において、ご協力をいただいた金蔵の九田茂元大区長、井池光夫老友会会長(元輪島市文化財保護審議委員会)、石崎英純 NPO法人金蔵学校理事長、荒木敏明万燈会実行委員会会長、金沢大学地域連携センターの堀内美緒様、井池光信様、金蔵集落の住民の方々にこの場を借りて感謝を記します。

参考文献

- 農林水産省農林振興局企画部農林政策課農村整備総合調整室・財団法人農村開発企画委員会：集落連携における新たな農村コミュニティの形成—その考え方・事例—，2007年3月
- 朝日新聞10版、2009年1月6日

注釈

- 金蔵は、1960年に比べて人口は75.1%、世帯数は36.6%減少している。2011年の世帯数は64世帯、人口は156人である。65歳以上の高齢者が52%である。(現地調査で収集した資料による。)
- 「万燈会」は、金蔵にある5つの寺の境内や周辺の棚田にワーカープローソク2万本を燈し、幻想的空間を演出する灯火祭である。

*神戸大学大学院工学研究科博士後期課程

**神戸大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

* Graduate School of Engineering, Kobe Univ.

** Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Graduate School of Engineering, Kobe Univ., Dr. Eng